



はやぶさ2 チーム

心 あ つ た か ニ ュ ー ス

NMCAA
NO3

はやぶさ2の最初のタッチダウンの会見感動しましたね。平日、人類の手が新しい星に届いた」星に手を届かせたはやぶさ2を支えた

日本の町工場の技術がいろいろなところで紹介されています。下町ロケツトは本場にあるのですね。横浜にある下平製作所は着地時の衝撃を和らげるパーツの金属部品など計8種類800個の部品を製作した。部品は100分の1ミリの誤差も許されず、表面の凹凸は職人が削って仕上げた。わずかな温度の違いで誤差が生じてしまうため、室温にも細心の注意を払った。職人の織田良和さん(47)は表面のなめらかさは機械には出せない」と胸を張り、同じく鈴木勝広さん(75)も「信じられないが、成功して良かった」と笑顔を見せた。川崎市中原区の金属加工会社「尹ンテック」は、エンジンを搭載する土台を製作した。エンジンを縦横60センチの板にエンジンをはめ込む円筒が四つ

ある。金属の特性などを熟知した加工技術を駆使し、2012年に完成させた。読売新聞より)小惑星に人工クレーターをつくる「衝突装置」(インパクター)の設計と爆薬の製造は、日本工機白河製造所(西郷村)が担った。衝突装置の完成までには幾多の困難があった

衝突装置の基本設計が本格始動した約2カ月後に、東日本大震災が発生した。製造所が被災し、衝突装置の開発はストップ。その年の秋には衝突装置の実証試験が予定されており、窮地に立たされた。幸運にも、電気系統は無事だったため、コンピュータによる設計を24時間フル稼働させた。納期との闘い。毎日がカレンダーとのにらめっこだった。同年5月下旬には製造所が全面稼働し、衝突装置の試作品の製造を再スタートさせた。実験や設計変更などの試行錯誤を繰り返して迎えた1回目の実証試験。見事、爆発によって衝突装置から打ち出された銅板は弾丸状に変形し、目標としていた秒速2キロの速さでの発射に成功した。松崎チーフは「成功の瞬間)心の中でガッツポーズをしていた。JAXAの関係者からも「T20点です」とお褒めの言葉を

もらった」とチームと喜びを分かち合った。福島民友ネットより)

JAXAの照井冬人主幹研究開発員は「あらゆる場面で高い精度を要求された。関連したメーカーの技術者やJAXAの航法誘導制御チームの協力和努力と意欲がなければできなかった。このチームを非常に誇りに思う」(産経新聞より)

編集後記

偉業を成し遂げるには、一人ひとりの努力と熱い思い、それとチーム力だと思いましたが。想いが結集したはやぶさ2頑張れ!